

埋文にいがた

No. 58
2007. 3. 20

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

18年度発掘調査遺跡の紹介

山元遺跡

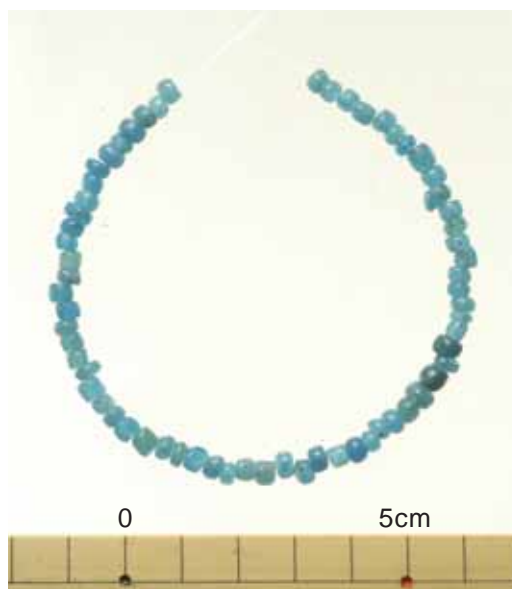
(岩船郡神林村大字下助測字山元)

山元遺跡は、旧岩船潟北縁の標高約40mの丘陵上にあり(麓の水田との比高は約35m)、越後平野を一望できる高所に立地します。日本海沿岸東北自動車道建設に先立つ試し掘りで見つかった新遺跡で、弥生時代後期後半を主体とする高地性環壕集落であることが明らかになりました。土器の多くは東南北部系土器(縄文が施された土器)です。日本海側では最北、東北系土器文化圏では初めて確認された高地性環壕集落です。

遺跡の範囲は2万㎡程で、谷を隔てて3か所の頂部平坦地(北側からA・B・C地点)に分かれます。試し掘りで見つかった遺構は、A地点では土坑墓が検出され、墓域と推定されます。B地点では平坦面で柱穴や縦堀などが、斜面には環壕があり、住まいの空間と考えられます。A地点で注目されるのは、多くのガラス小玉です。副葬品と思われ、1つのお墓から約70点検出されました。東日本の弥生時代後期の墓では、有数の出土量です。B地点の平坦面の建物は、掘立柱建物が中心と思われます。また、平坦面で見つかった2条の縦堀は、幅約1.5m、深さ約60cmで、細長い頂部平坦地を分断し、谷まで伸びているものもあります。環壕は南側(越後平野側)で幅約2m、深さ約70cm、北東側では更に規模が小さくなり、断面もL字形に近い箇所があります。

環壕は敵から村を守る防御の施設で、高所に村を構えるのはより防御を意識した結果という説があります。山元遺跡が戦乱など社会的緊張状態を反映した村とすると、東北系土器文化圏までその影響が及んだことになります。貴重な遺跡と認められたことから、試し掘りで調査は終了し、現状保存することが決定しています。

(滝沢規朗)



ガラス小玉



遠景(南から)



環壕の断面

桜林遺跡

(岩船郡荒川町大字金屋字桜林1372ほか)

桜林遺跡は荒川左岸の沖積地に位置します。発掘調査は日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、平成18年8月25日から11月16日にかけて行いました。

現在の地面から40cmほどの深さ(標高約3.5m)で、平安時代、室町時代～江戸時代はじめ頃の遺構を検出しました。江戸時代の検出遺構は墓1基のみでした。遺体は残っていませんでしたが、漆器の椀と銭貨6枚(寛永通宝、永楽通宝)が出土しました。これ以外の遺構はほとんどが室町時代のもので、掘立柱建物6棟、井戸19基、土坑10基、溝10条、柱穴142基などです。井戸が多いのが目を引きますが、遺跡の地盤は大変弱く、掘り直しが多かったためかもしれません。建物は、この時代の一般的な建物と比べて柱の間隔が非常に広くとられており、柱間も桁行・梁間ともに1間と簡素な構造です。

出土した遺物には珠洲焼の甕や播鉢、桶形の木製容器(曲物)といったものが目立ちますが、出土量は多くありません。珍しい遺物としては、精米などに使う木製の臼がほぼ完全な形で出土しました。

今回の調査範囲は遺構や遺物の内容から考えて、当時の集落の一部とその縁辺部であったと考えられます。

(株吉田建設 継 実)



江戸時代の墓



土坑検出の木臼

宮の越遺跡

(岩船郡神林村大字新飯田字宮ノ越14ほか)

宮の越遺跡は荒川の右岸に広がる低湿地部にある遺跡です。今回の調査区は、百川の自然堤防上にある遺跡で、北側には干拓で埋め立てられた旧岩船潟が広がっています。

日本海沿岸東北自動車道建設に伴い昨年10月に調査しました。発掘調査面積は611㎡です。検出した遺構は、土坑1基、打ち込まれた杭が8本です。遺物には、須恵器、土師器、製塩土器、土錘などがあります。ただし、遺物は全て洪水堆積土中からの出土です。遺物の器種構成は無台杯、杯蓋、横瓶、大甕、小甕、鍋、土錘、製塩土器と古代の集落で普通に使用される構成を示していますので、近接する遺跡本体部分から供給されたものと考えるのが妥当と思われる。ただし、出土した遺物が9世紀の中頃のものであるのに対し、遺構の時期は、杭の放射性炭素年代測定値が7世紀代と、互いの年代が合致しません。遺跡全体の存続年代について今後の調査により検討する必要があると考えます。

(株シン技術コンサル 大島秀俊)



調査状況



須恵器杯

なかそね 中曽根遺跡

(岩船郡荒川町大字金屋字中曽根725ほか)

中曽根遺跡は、荒川左岸の微高地上に立地していません。日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、昨年度に引き続き平成18年7月10日から10月11日まで発掘調査を行いました。今回の調査区は、昨年度の調査区の東側に当たります。

検出した遺構は、掘立柱建物2棟、ピット列2条、井戸2基、土坑6基、溝状遺構4条、ピット101基、性格不明遺構4基で、そのほか自然流路2条です。掘立柱建物のうち1棟には柱根が残存しており、放射性炭素年代測定から8世紀後半～9世紀前半に建てられたものと考えられます。また性格不明遺構のうち2基は、土師器椀がたくさん出土しており、出土状況からゴミ捨て場と考えられます。出土した遺物は、須恵器・土師器・木製品・石製品などで、須恵器の中には「石」と墨書されたものもみられます。また木製品の中には、漆器盤や祭祀に用いられる斎串が含まれています。

本遺跡は、遺構・遺物などから8世紀～11世紀初頭に営まれた、当時の一般的な集落と考えることができます。
(加藤建設(株) 青木 学)



SE277遺物出土状況(南から)

さるびたい 猿額遺跡

(阿賀町大字西字猿額中丸1849ほか)

猿額遺跡は、小谷を隔て大坂上道遺跡の約100m西の段丘上に立地し、標高82～88mを測ります。周囲には植林による杉林が広がっています。遺跡の南側は磐越自動車道建設工事に関わり、平成4・5年に発掘調査しました。今回、一般国道49号揚川改良道路建設工事に伴い、8月～11月にかけて発掘調査を行いました。

調査により、鹿瀬軽石質砂層(福島県の沼沢火山噴出物で約5,000年前の二次堆積層)を挟み、上下2層の遺物包含層を確認しました。上層ではピット2基を検出し、縄文時代中期以降の土器および剥片石器・打製石斧が出土しました。下層では土坑6基、集石土坑1基、ピット99基、焼土5か所、炭化物集中7か所を検出し、縄文時代前期の土器・石器および旧石器時代の搔器などが出土しました。

下層で確認した遺構や土器・石器などの遺物は、約5,000年前の鹿瀬軽石質砂層堆積直前の縄文人の活動や、この遺跡の性格を探る手がかりとして注目されます。
(桐原雅史)



下層出土の一括土器(北から)

かたぎ 堅木遺跡

(南魚沼市大字野田字堅木820 - 1ほか)

堅木遺跡は魚野川の支流である庄之又川しょうのまたがわの左岸段丘上、標高約230mの緩やかな傾斜面に立地します。国道253号八箇峠道路はつかとうげの建設工事に伴い、約1,270㎡を平成18年9月初旬から12月初旬まで発掘調査しました。

試掘調査で平安時代と中世の遺跡が確認されていましたが、河川の氾濫や流路の移動などの自然現象や昭和30年代まで何度か行われた耕地整理のため、中世の遺跡はほとんど削平され、残っていませんでした。また、平安時代の遺跡の遺物包含層も大部分が失われていました。包含層が削平されたため遺物の検出は少なかったのですが、遺構確認面からはたくさんのピット（小さな穴）や溝が見つかりました。溝は平行に並んでいるものが多く、畑うねの畝として利用されていたのではないかと考えています。

調査の進行により、調査面下にもう一面の遺構群が見つかりました。同じ平安時代の遺構ですが、若干時期が古いものです。また、遺跡の範囲も南側に広がっていることが判明し、来年度以降も引き続き調査を行うこととなりました。

(奥村伸男)



見つかった上層の遺構

ひめぐぜ 姫御前遺跡

(糸魚川市東寺町2丁目ほか)

姫御前遺跡は、海岸線から350m内陸の自然堤防上に立地します。北陸新幹線の建設に伴い、3,120㎡の範囲を平成18年8月から11月にかけて調査したところ、古墳時代前期（4世紀）と室町時代（15～16世紀）の遺構・遺物が見つかりました。

室町時代の遺構は、掘立柱建物が2棟見つかりました。この建物の一部は調査区の北側に伸びていることから、今回調査した範囲は集落の周縁部分であると考えられます。また、この建物の周辺には柱穴が多数見つかり、くり返し建て直しが行われたことがうかがえます。遺物は箸状木製品が300点以上見つかりました。

その中でも、箸状木製品が地面に突き刺さった状態の遺構が6基見つかったことが注目されます。当時の人々が突き立てたものと思われます。ほかに人形や刀形などの形代かたしろや銭貨も見つかり、ここで何らかの祭祀さいしが行われた可能性が高いと考えられます。

(小川真一)



中世の掘立柱建物(西から)

整理報告遺跡

てらまえ
寺前遺跡

(三島郡出雲崎町大字乙茂字寺前ほか)

一般国道116号出雲崎バイパス建設に伴い、昭和63年～平成2年の3か年にわたって発掘調査を実施しました。遺跡は海岸から約2km、島崎川左岸の西山丘陵から延びる尾根およびその両側の谷部分にあたり、発掘調査面積は延べ約8,000㎡になります。尾根上は平安時代、谷部分の中世から縄文時代の遺跡です。現在、遺物の実測作業を中心に整理作業を進めており、報告書刊行は平成19年度の予定です。

中世 - 尾根を挟んだ両側谷部分で見つかりました。上下2面あり、時代は12世紀後半から15世紀になります。上面では掘立柱建物16棟、井戸8基、溝多数を検出しました。総柱の建物が多く、5×3間の大型建物もあります。建物の柱穴には底面に礎盤(板)を敷いたものが多いです。下面では、掘立柱建物11棟、井戸5基を検出しました。また、木や枝(粗朶)を敷き詰めた幅2m程の木道も2本ありました。遺物は木製品をはじめとして多くが出土しています。土器では珠洲焼、青磁・白磁などの輸入陶磁器、瀬戸美濃産陶器、土師質土器皿があります。木製品では「蘇民将来...」と書かれた木簡、漆器椀や皿および製作途中の木地や漆塗りの刷毛があり、ここで漆製品が製作されていたことがわかります。製鉄関連の遺構は確認されませんでした。遺物は多く出土しました。特に鑄造関連の遺物が多く、溶解炉の炉壁やフイゴの羽口が目立ちます。鑄型では、梵鐘の撞座部分があり、梵鐘を作っていたことがわかります。鉄製品では作業用と考えられる刀子や鍋の破片などがあります。このように中世は漆製品や鑄造技術集団の存在から、在地有力者の居住地であったと考えられます。

平安時代 - 尾根上に竪穴建物2棟や溝があり、谷筋では畝状小溝があります。遺構が少ない割には遺物が多く出土しています。特に小泊産と考えられる須恵器の杯が多くあります。出雲崎という立地から考えると佐渡から直接渡ってきた可能性があります。ほかに金メッキした銅製鈴、腰帯(ベルト)につけた石製の飾りなどもあります。

弥生～古墳時代 - 谷部分で遺物が少量出土しましたが、ガラス小玉や碧玉製管玉もあります。

縄文時代 - 後期前半と晩期後半の遺構、遺物が見つかりました。両時期ともに谷部分で川跡が確認され、そこにトチノキやドングリなどをアク抜きのため水さらしたと考えられる木組み遺構が検出されました。新潟県内では数少ない発見例です。遺物は土器がほとんどで、特に炭化物やススの付着した土器が目立ちます。晩期では、粗製土器の割合が高いことが特徴です。(高橋 保)



中世上面の井戸・掘立柱建物



粗朶を敷いた木道(中世)



竪穴建物(平安時代)



沢の中の木組み遺構(縄文時代後期)

保存処理室から

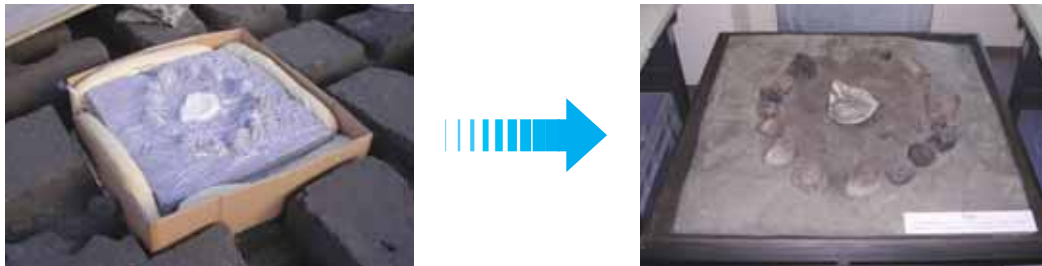
遺構の保存 - 発掘現場の臨場感を保存・展示する -

発掘現場の見学会などに参加して、昔の人々が使った道具や生活の跡を直接目にとると、その臨場感から「当時の人々はここでどのような暮らしをしていたのだろうか?」と想像力をかきたてられる方が少なくありません。土器や石器などの遺物は遺跡から容易に取り上げることができるため、発掘調査終了後、全て埋蔵文化財センターに持ち帰り、保存・展示することができます。しかし、地面から切り離すことが難しい^{たてあなじゆうきよ}竪穴住居などの遺構は、残念ながら必要な記録を取った後に壊されてしまうものがほとんどです。そこで、保存処理室では新潟の歴史を語る上で貴重な遺構の一部を保存し、発掘現場の臨場感を多くの方々に体感していただくため、遺構の取り上げと保存処理を行っています。

遺構を切り取って保存・展示する 縄文時代晩期の^{みちした}道下遺跡（胎内市）では、越後平野の沖積低地では初めての竪穴住居が見つかったことから、住居の中央に設けられた直径約60cmの^{いしがこいろ}石囲炉を切り取って保存することになりました。

まず、石囲炉の周囲約80cm四方を柱状に掘り下げ、遺構の表面をトイレットペーパーで保護します。次に、断熱材として利用されている発泡硬質ウレタンでこれを覆い、地面から切り離します。切り取った石囲炉は室内でウレタンを開封し、表面のクリーニングを行います。その後、余分な土を削ってから、土壌強化剤を塗布して土を固めます。最後に展示用に作成した木製の箱に収め、第13回報告会で展示公開しました。

縄文人が実際に囲んでいた石囲炉は、出土品と合わせて見学者の想像を膨らませます。



遺構を剥ぎ取って保存・展示する 古墳時代の集落であった^{みちばた}道端遺跡（荒川町）では、生活の場と祭祀の場を区画する2条の^{くいれつ}杭列が見つかりました。この時期のものとしては県内初の発見であったことから、一部を剥ぎ取って保存・展示することになりました。

まず、杭列の平・断面に強力な接着剤を塗布し、裏打ちとしてガーゼを張り重ねます。そして、乾燥したところでガーゼごと剥ぎ取ります。剥ぎ取った資料は余分な土を水で洗い流し、乾燥させた後、表面に濡れ色を戻すアクリル樹脂を塗布します。最後に化粧板に接着剤で貼り付け、展示公開しました。

また、^{きんせい}近世新潟町跡（新潟市上大川前通10番町）では、発掘現場の地層断面の剥ぎ取りを行いました。新潟島に人々が進出を始めた明暦元（1655）年から19世紀にかけて、造成工事を繰り返しながら人々が生活を営んでいたことを示す貴重な資料を得ることができました。（調査課資料担当：三ツ井朋子）



埋文インフォメーション

平成18年度出土品展終了報告

10月12日(木)から11月12日(日)まで、糸魚川市青海総合文化会館において「平成18年度出土品展 出土品が語る新潟の歴史」を開催しました。糸魚川市教育委員会が発掘調査した^{ふえふきだ}笛吹田遺跡と、当事業団が平成17年度に発掘調査した13遺跡の出土品と写真パネルを展示し、延べ550人の来館がありました。また、11月5日(日)には発掘調査成果の報告と展示解説を行い、県内外から32人が参加しました。

当事業団は糸魚川市内で北陸新幹線建設に関連した発掘調査を進めています。今回出展した^{おがくち}大角地遺跡もその一つです。地元ということもあって、笛吹田遺跡とともに来館者の関心を集めていました。今後も地域の歴史や文化を語りかける出土品の公開を続けていきます。詳細は本紙または事業団ホームページに掲載します。ご期待下さい。



発掘調査成果の報告(糸魚川市教育委員会)



展示解説

^{たて} 櫛 ^{くし} 作りに挑戦

事業団は文化行政課主催の埋蔵文化財講座(年4回開催)に協力しています。12月8日に県埋蔵文化財センターで行われた第4回講座では、参加した方々に竹串を使った^{あおた}豎櫛作りに挑戦してもらいました。豎櫛は主に髪を束ねる際の髪飾りとして利用されたようです。青田遺跡(旧加治川村)など縄文時代の遺跡から出土したものを参考にしました。

今回利用した竹串は、安全のため先端を少しカットして丸みをもたせてあります。これを発泡スチロールに10~15本刺して並べ、頭部をタコ糸で編んで固定します。最後にアクリル絵具で着色し、乾燥させて完成です。所要時間は約2時間です。4月から小・中学生の体験学習メニューに加える予定です。



好みの長さに切った竹串を発泡スチロールに刺す。工夫次第で様々な編み込みができる。



好みの色を塗る。2度塗りするときれいに仕上がる。



完成品

県内の遺跡・遺物56

よこ たき やま はい じ
横滝山廃寺跡（昭和59年 県指定）

遺跡所在地：長岡市寺泊竹森横滝1116

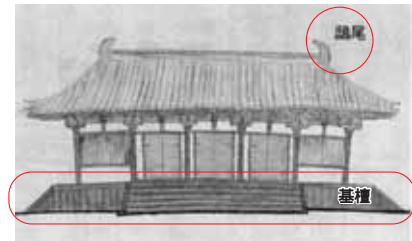
横滝山廃寺は越後平野の西縁、南北にのびる西山丘陵の東側丘陵北端に位置し、北に弥彦山、国上山の靈峰を望むことができます。明治年間から軒丸瓦（写真3）や平瓦の出土が知られていましたが、昭和30年代に鴟尾片（初期のシャチホコ シャチホコの原型 写真4）や「寺」字墨書土器（写真5）などが見つかったことから、寺院跡と考えられるようになりました。

発掘調査は昭和51年から59年まで計4回行われ、7世紀後半から8世紀初頭に建立された寺院であることがわかりました。発掘された寺院跡としては県内最古です。第3・4次調査では、金堂と推定される建物基壇1基が確認されました。東西約12m、南北約10mで木造基壇外装という珍しい構造をしていました（写真1）。このときに見つかった塼仏（写真6）ほかは、この寺の存在を裏付ける貴重な資料です。塼仏は蓮台の上に結跏趺座する如来形を半肉彫りした独塼仏で、金堂の内部壁面に飾られていたものと考えられています。

資料提供：長岡市教育委員会



1 基壇



2 金堂想定図



3 軒丸瓦



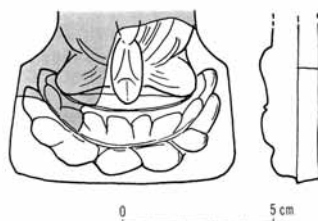
4 鴟尾片



5 「寺」字墨書土器



6 塼 仏



7 塼仏実測図(アミ部分推定)

埋文にいがたNo 58

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1
TEL (0250) 25-3981
FAX (0250) 25-3986
e-mail: niigata@maibun.net
URL: http://www.maibun.net
印刷 阿部印刷株式会社